

「性別にとらわれない」

氷上中学校 三年 門岩 菜緒

もし、同じクラスの男の子の私服がスカートだったらどう思いますか。おそらく、大半の人がこう思うでしょう。「なんでスカートなの？」でも、こう思った人は、男の子自身の自由を損害することにつながるのではないかでしょうか。

私が小学生の頃、学校に身体も心も女の子で、自分の事を「俺」と呼んでいたAちゃんがいました。私は、変だとは思いませんでしたが、本当は男の子になりたいのかなと考えることもあり、少し引っかかっていました。そしてある日、Aちゃんと仲の良い男の子がこう言いました。

「Aちゃんってなんで自分の事俺って言っとん。」

こう言われたAちゃんは、「俺」って呼びたいからと答えていました。男の子は、何の悪気もなく疑問に思ったことを聞いたのでしょう。でも、Aちゃんはどう感じたでしょうか。そう言われたことによって、本当は「俺」と言いたくても、その気持ちを隠して「私」と呼ぶようになるかもしれません。何の悪気もない男の子のたった一言によって、Aちゃんの自由が奪われ、目に見えないところで深い傷を負わせてしまう可能性は十分にあるということです。

近年、ジェンダーレスという言葉をよく耳にします。このジェンダーレスとは、「男らしさ」「女らしさ」という固定概念にとらわれず、個人の自由な生き方や表現を尊重する考え方です。身近な例として、学校の制服があります。昔は、女子はリボンとスカート、男子はネクタイとズボンのように、学校の決まりによって決められていましたが、今は自由に選べます。また、男女兼用の服が増えたり、男性でも育休が取れるようになったりしています。ですが、完全にジェンダーレスの考え方方が浸透しているわけではありません。例えば、政治分野で女性の活躍が遅れています。賃金格差があったり、女性に家事が任されています。また、前述の内容のように、服装や言葉遣いにとらわれた差別が残っています。

この考え方をもとに、男の子の私服がスカートだった話を考えてみましょう。スカートをはいている姿に対して「なんでスカート」と思った人は、「なんで」と「スカート」の間には「男なのに」が隠れているのではないでしょうか。「男なのに」というのは、男性の役割や能力の決めつけにあたります。もちろん女性でも言える事です。「女なのに料理できないんだ。」これは、女性は料理ができる当たり前という決めつけになります。このように、性別によって決めつけてしまうのは、立派な性差別です。

どんな見た目でも、どんな話し方でも、どんな役割でも、私たちは同じ人間です。一人ひとりに自分のプロフィールを自分で選ぶ権利があるのです。生まれ持

った身体的な性の区分はあります。ですが、その性によって個人の役割や能力、生き方、表現を否定し自由を奪ってしまうことは、平等な社会をつくっていくうえであってはならないことだと思います。まだ性差別の残っているこの社会で、一人ひとりがどんな考え方をするかによってこれからの社会は大きく変わっていきます。また、今悩みを抱えている人がいたら、誰にでもいいから相談してください。同じ悩みを持った仲間はどこかにいます。恥ずかしいことではありません。そして、この世界にいる人すべてに、幸せを求める権利があることを再認識して、平等な社会を大切にしてほしいと思います。